江戸川乱歩　作『黒蜥蜴』より【名探偵の敗北】

構成・脚色：studio_o3

女賊（にょぞく）「黒トカゲ」は絶体絶命の窮地に立った。

味方はかよわい女一人、敵は警官まで加わった四人の男、逃げようとて逃げられるものではない。だが、不敵の女賊は、最後のどたん場に立って、何がおかしいのか、異様に笑い出したのだ。

「フフフフフ、これが今晩のお芝居の大詰めってわけかい。まあ、名探偵っていわれるだけのことはあったわね。今度はどうやら僕の負けだね。負けということにしておこうよ」

敗北にうちひしがれながらも「黒トカゲ」は、持ち前の鋭い頭脳を敏捷（びんしょう）に働かせて、この窮地を脱する計画を思いめぐらした。そして、とっさのまに一つの冒険を思い立ったのだ。彼女はやっと引きつった表情をやわらげ、明智探偵を笑い返すことができた。

「で、どうしようっていうの？　僕を捕縛しようとでも思っているの？　ホホホホホ、それはちっと、虫がよすぎやしなくって？」

なんという傍若無人（ぼうじゃくぶじん）。逃げ路はたった一つ、廊下に通ずるドアしかない。しかもそのドアの前には、今はいってきたばかりの明智の部下と警官とが、通せんぼうをして立ちはだかっている。窓から飛び出そうにも、ここは階上だし、そのそとは、グルッと建物でかこまれた内庭なのだ。一体全体、彼女はどんな方法で、この窮地を脱するつもりなのだろう。

「つまらない虚勢はよしたまえ。さあ、警官、この女をお引き渡しします。遠慮なく縄をかけてください。これが今度の誘拐団の主犯です」

明智は「黒トカゲ」の挑戦を黙殺して、入口の警官に言葉をかけた。よく事情を知らない警官は、この美しい貴婦人が犯人と聞いて、面くらったように見えたが、いわれるままに、緑川夫人のそばに近づこうとした。

「明智さん、右のポケットをさわってごらんなさい。ホホホホホ、からっぽじゃなくって」

緑川夫人の「黒トカゲ」が、近づく警官を尻目にかけながら、かん高く叫んだ。

明智はハッとして、思わずそのポケットへ手をやった。ない。確かに入れておいたブローニングがない。

「ホホホホホホ、明智さん、スリの手口もご研究にならなくっちゃだめだわ。あなたの大切のもの、ここにありますのよ」

女賊はにこやかに笑いながら、洋服の胸から小型の拳銃をつまみ出してキッと前に構えた。

「さあ、皆さん、手をあげてくださらない。あたし、人間の命なんて、なんとも思ってませんのよ」

今一歩で彼女に組みつこうとしていた警官が、立ち往生をしてしまった。

「手を、さあ、手をあげなっていったら」

「黒トカゲ」は眼をすえて、紅い唇をなめながら、男たちに向かって次々と筒口（つつぐち）を向けて行った。彼女の殺気ばしった、というよりは一種気違いめいた表情を見ると、いわれるままに手をあげないではいられなかった。警官も、明智の部下も、岩瀬氏も、名探偵明智小五郎さえも、ばんざいを中途でやめたような恰好をしないわけにはいかなかった。

緑川夫人はあだ名の「黒トカゲ」そっくりの素早さで、サッとドアのそばへ駈け寄った。

「明智さん、これが、あんたの第二の失策よ。ほら」
言いながら、あいている左手をうしろに廻して、さっき明智がドアをあけた時、鍵穴に差したままにしておいた鍵を抜き取ると、キラキラと顔の前で振ってみせた。

「それから、お嬢さん！」
彼女はもうドアをあけて、片足を廊下にふみ出しながら、しかしピストルは油断なく構えたまま、今度は早苗さんに声をかけた。
「日本一の宝石屋の娘さんに生れついたのが不運とあきらめてね。それに、あんたは、あんまり美し過ぎたのよ。僕は宝石もご執心（しゅうしん）だけど、宝石よりも、あんたのからだがほしくなった。ねえ、明智さん、僕は断念しないよ。お嬢さんは改めて頂戴（ちょうだい）に上がりますよ。じゃ、さよなら」

バタンとドアがしまって、そとからカチカチと鍵をかける音。早苗さんと四人の男とは、部屋の中へとじこめられてしまった。鍵は一つしかない。それを持ち去られたのでは、ドアを叩き破るか、高い窓から飛び降りるほかに、ここを脱け出す方法はない。
明智は卓上電話に飛びついて、交換台を呼び出した。

「もしもし、僕は明智、わかったね。大急ぎだよ。ホテルの出口という出口に見張りをさせてくれたまえ。そして、緑川夫人、緑川夫人だよ。あの人がいま外出するから、つかまえるんだ。重大犯人だ。どんなことがあっても逃がしちゃいけない。大急ぎだよ」

電話をかけ終ると、明智は地だんだをふむようにして、部屋の中を往ったり来たりしていたが、また、せっかちに受話器を取った。
「もしもし、さっきのこと、うまくやってくれたかい。ウン、よしよし、それでいい。ありがとう。じゃ、ボーイに合鍵を早くって言ってくれたまえ」

それから、彼は岩瀬氏の方に向き直っていうのだ。
「出口という出口には見張りがついたそうです。あの女がいくら早く走っても、出口までもなかなか遠いのだから、多分、ええ、多分大丈夫ですよ」

だが、この明智の機敏な手配それ自身が、またしても一つの失策であった。
「黒トカゲ」は大急ぎで階段を降りると、実に意外にも、出口に向かおうとしないで、自分の部屋へはいってしまった。
三分間、かっきり三分間であった。
再び彼女の部屋のドアがあくと、そこから一人の意外な青年紳士が出てきた。恰好(かっこう)のいいソフト帽、はでな柄の背広服、気取った鼻目がね、濃い口ひげ、右手にはスネークウッドのステッキ、左手にはオーバーコート。

これがわずか三分間の変装とは魔術師と自称する「黒トカゲ」でなくてはできない芸当だ。その上、なんとまあ抜け目のないことには、トランクの中の宝石類は、一つもあまさず、その背広服のポケットにおさまっていたのである。
青年紳士は廊下の曲がり角で、ちょっと躊躇(ちゅうちょ)した。表からにしようか、それとも裏口からにしようかと。
「黒トカゲ」は大胆不敵にも、胸を張り、ステッキを振りながら、靴音も高く表玄関を通ってそとに出た。
そこには、支配人をはじめ三人のボーイが、ひどく緊張して見張り番を勤めていたのだけれど、目ざすは緑川夫人と、女客(おんなきゃく)ばかりを注意していたものだから、ニッコリえしゃくして通り過ぎたこの青年紳士を、まさかそれとは思いもよらず、「どうもお騒がせいたしまして」と、丁寧にお辞儀までして、送り出したのであった。

青年紳士は、玄関の石段をコツコツ降りると、口笛など吹きながら、ゆっくりと門のそとへ歩いて行った。

ホテルの塀にそって、薄暗いペーヴメントを、少し行った所で、煙草を吹かしながら様子ありげにたたずんでいる一人の洋服男に出会った。

青年紳士はなに思ったのか、いきなりその男の肩をポンと叩いて、快活にいった。

「やあ、君はもしや明智探偵事務所のかたじゃありませんか。なにをぼんやりしているんです。今ホテルでは賊が捕まったといって大騒ぎですよ。早く行ってごらんなさい」

すると、案のじょう、その男は明智の部下であったと見えて、

「人違いじゃありませんか。明智探偵なんて知りませんよ」

とさすがに用心深い返事をしたが、滑稽にも、言葉と仕草とはうらはらに、青年紳士が二、三歩行くか行かないうちに、もうアタフタとホテルの方へ駈け出していた。

「黒トカゲ」は、クルリと廻れ右をして、そのうしろ姿を見送ったが、こみ上げてくるおかしさに、ついわれを忘れて、

「ウフフフフフフ」

と、無気味な笑いをもらすのであった。

つづく

底本：「黒蜥蜴」江戸川乱歩推理文庫、講談社
１９８７（昭和６２）年９月２５日第１刷発行
初出：「日の出　第三巻第一号―第十二号」
１９３４（昭和９）年１月号～１２月号